地域の“健康よろず屋薬局”

調剤と介護のリンクに注力

メディックスグループ　木村茂美社長

50周年を迎えるメディックスグループ（本社・東京都調布市）は、1968年に東京都八王子市において開局し、69年に健康相談薬局としてスタートした。現在、同グループの調剤薬局総数は63店舗に及び、東京都や神奈川県を中心に栃木県、群馬県にも出店している。また、調剤薬局だけにとどまらず、現在は訪問看護・介護事業・サービス付き高齢者賃貸住宅事業、整骨院事業、ジェネリック医薬品卸販売事業、医薬品製造事業、OTC販売事業など、あらゆる面から健康に携わる活動の幅は非常に広い。同グループの木村茂美取締役社長が「地域の健康よろず屋薬局のようなイメージ」と語るように、薬のことだけでなく、介護をはじめ様々な相談に対応できる薬局になるべく、グループを挙げて日々挑戦を続けている。

メディックスグループには主な事業会社として、「メディックス」「ボニー」「まごころ」「玄妙洞本舗」「ライフケア・桜」の5社がある。木村社長は、「これらの会社のつながりを深めるため、約1年前に経営理念や経営ビジョンを統一した」と説明。経営ビジョンの定性ビジョンとして、『あたたかく人に寄り添い、地域とつながるライフケアサポーター』を掲げている。

このビジョンに関して木村社長は、「50年に及ぶ歴史の中で、われわれメディックスグループは、人、社会との〝つながり〟を大切にしてきた。長い年月をかけて培われたアットホームな社風は、会社内だけではなく地域社会の皆様へ、あたたかく人に寄り添っていく姿に表れていくと信じている」とし、「健康だけでなく、その方の人生（ライフ：life）、そしてご家族の人生にも関われる仕事をしていきたい。単なる管理や介護だけでなく、心配り（ケア：care）できるようになりたい。そしてパートナーとして、より縁の下の力持ち（サポーター：supporter）に徹していきたい。これらの想いを込めてビジョンを創った」とする。

このビジョン実現に向けて業務を展開しているが、各事業会社に関して木村社長は、「メディックスは調剤薬局事業、グループ会社の本部機能を担っている」とし、「ボニーは調剤薬局事業、ジェネリック医薬品卸売業を行っている」と説明する。また両社の調剤薬局事業においては15年前から施設の薬品管理に携わる業務も取り組み始め、現在では10店舗以上が行っている。

まごころについては、「整骨院事業・介護事業を行っており、訪問介護、訪問看護、デイケアなどに取り組んでいる」とし、玄妙洞本舗に関しては、「調剤薬局事業に加え、OTC医薬品やサプリメントの製造を行っている」とし、ライフケア・桜は、「サービス付き高齢者賃貸住宅事業を行っている」とする。

医療から介護まで何でも相談できる薬局に

こうした各社の事業を背景に、同グループが最も注力しているのが、「調剤と介護をリンクさせること」だ。木村社長は、「以前から、薬剤師は薬局内での仕事はもちろんのこと、もっと薬局外にも出て行くべきだという指摘があった。最近では、対物業務から対人業務へという国の方向性も明確になってきている。こうした点には、前回（2016年度）の調剤報酬改定以降、対応するよう努めてきた」とし、「そこに介護をリンクさせ、医療のことから介護のことまで何でも相談していただければ、対応させていただくというスタンス。患者さんや利用者さんにとっても、調剤と介護を関連会社が行っているということはメリットになると思う。薬局に来局した際に、関連会社が介護も行っていると分かれば、介護のことも相談してみようと考えるケースも出てくるのではないかと思っている」と説明する。

同グループでは現在、調剤と介護をリンクさせるという観点で、薬局近隣の空きスペースを活用して居宅介護支援事業所を立ち上げることに取り組んでいる。木村社長は、「既に空きスペースを活用し2軒の居宅介護支援事業所と訪問介護で立ち上げており、チーム医療という形で地域に密着していこうと考えている」と語る。

また同グループの調剤薬局店舗は、主に地域に根づいたクリニックや診療所の近くにあることが多く、近隣の地域住民との仲も良いなど、地域へ貢献できる環境は整っているといえよう。実際に、18年度調剤報酬改定で新設された「地域支援体制加算」についても、「なるべく1軒でも多く取るようにしている」（木村社長）とする。

さらに木村社長は、「かかりつけ薬局やかかりつけ薬剤師、健康サポート薬局の取得にも一生懸命に取り組み、健康サポート薬局は5月に1号店が誕生した」ことを紹介。「地域でメディックスグループの薬局に相談すれば、何でも対応してくれるという形にしていきたい。地域の〝健康よろず屋薬局〟というイメージ戦略を立てて取り組んでいる」と強調する。

〝健康よろず屋薬局〟として様々な相談等に対応するためには、薬剤師をはじめとする薬局スタッフにも高い能力が求められる。そうした観点から、同グループが行っている教育や研修も充実している。新人研修や中途採用の薬剤師に対する研修、管理薬剤師の研修も同グループの教育部が担当し、積極的に行われている。

さらには、病気を知らなければ、ポリファーマシーなど昨今の医薬品に関わる問題にも対応できないという思いから、「疾病と薬剤」と題し、〝処方を読む〟勉強会を開催したり、集団での処方解析などにも取り組んでいる。

タブレット端末で業務効率化

調剤薬局事業においては、在宅対応が各店舗で増加してきているという。木村社長は「在宅対応や施設対応の場合、患者さんの背景など全ての資料を持って行くわけにはいかない」と指摘。そこで在宅対応の多い同グループの店舗から順次導入しているのが、ズーの「kusudama（薬玉）」。タブレット端末で、薬局の内外問わず全ての業務をサポートする画期的なツールだ。「薬玉はタブレットタイプで、在宅先や施設などでも、これまでの薬歴や併用薬の情報等が全て見られる。また、エリアマネージャーなどが店舗間を移動して管理する上で、各店の情報をその都度きちんと確認することもできる」と評価は高い。こうした優れたシステムも「いずれは全店に導入しようと思っている」（木村社長）と語るなど、業務の効率化の面での取り組みにも積極的だ。

こうした積極的な姿勢は、待ち時間など患者の満足度向上に向けた取り組みにも表れている。同グループの調剤薬局全店舗で、EPARK（イーパーク）の電子お薬手帳を導入。木村社長は、「面対応の患者さんを獲得するための一つの戦略として導入したが、処方箋を伝送できるので、広域病院の処方箋でも待ち時間なく対応することができている」と話す。

今後の方向性に関しては、「メディックス、ボニー、まごころ、玄妙洞本舗、ライフケア・桜が一つのグループとしてつながり合って、シナジー効果を出していきたい」との考えを強調。木村社長は、「団塊の世代が後期高齢者を迎える2025年問題（超高齢化社会）、人口の減少を見据えている。そうすると当然、患者さんの数も減少してくることになる。そうした中では、面の処方をどのように獲得していくかが非常に重要」とし、「地域包括ケアシステムに積極的に参画し地域で最も慕われる薬局を目指し〝メディックスグループの薬局に行けば何でも相談できる〟〝色々なことを教えてもらえる〟〝薬以外の話でもきちんと聞いてくれる〟といった様々な対応ができる薬局・企業となっていきたい」と語る。